

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531175

研究課題名(和文) 郷土の芸能の伝承による世代間の交流と地域文化の振興

研究課題名(英文) Interchange between Generations and Promotin of Local Culture by the Succession of Local Performing Arts

研究代表者

桂 博章 (Katsura, Hiroaki)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：60185832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な目的は、郷土芸能を振興するために、学校、学部、芸能保存会、研究組織の間の連携モデルを確立すること、及びモーションキャプチャ・データを利用し、郷土芸能の学習における初心者と熟練者の演奏動作の違いを明らかにすることにある。本研究からは、次のことが明らかになった。

1) 高校生と大学生による郷土の芸能の習得は、地域文化の振興に寄与した。2) 熟練者の太鼓の撥先の軌跡と、身体部位の軌跡は安定しているが、初心者の軌跡は不安定で単純である。3) 「ささら舞い」の動作において、熟練者の重心の位置は低く、上下動の幅が大きい。また、学習の最初の段階では、誇張した動きになる傾向がある。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are to establish the model of collaborations among educational institutions, the faculties of university, the society for the preservation of local performing arts, and the research institution to promote local performing arts, and to investigate the differences of physical motions for local performing arts between the skilled performers and the beginners from motion capture data. The results of this research are shown as follows:

1) The learning of local performing arts by high school and university students contributed the promotion of the local culture. 2) Skilled performers' locuses of the plectrum of the musical instruments and body parts are stable, while those of beginners are unstable and simple. 3) As for as "Sasara" dance, skilled performers' amplitude of vibration of vertical motions is bigger than that of beginners, and beginners tend to overemphasize the motions of body parts to grasp movements of dancing in an early stage of learning.

研究分野：音楽教育学

キーワード：郷土の芸能 ささら 祭囃子 伝承 地域文化 演奏動作 モーションキャプチャ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 学校教育における郷土芸能の学習

秋田県は芸能の宝庫で、県の各地域には固有の民俗芸能が数多く伝承されており、国指定重要無形民俗文化財の数も16件と、47都道府県の中では群を抜いて多い。しかし、その一方で伝承者の高齢化と地域の過疎化が他県よりも進んでおり、共同体における多くの芸能の伝承が途絶えたり、消滅の危機に瀕したりしている。

地域における芸能の伝承と共に、学校において郷土の芸能を指導することも、教育の重要な役割のひとつである。音楽科の学習指導要領では、民謡も含めた「郷土の音楽」を指導することが明記されているが、小・中学校の授業で、「郷土の音楽」の指導を受けた学生の数は少なく、音楽科の教員が簡単に入手でき、授業で容易に利用できる「郷土の音楽」の実技教材を開発することが求められている。また、秋田県においては「郷土の音楽」の習得の機会として、高校の郷土芸能部の活動も大きな比重を占めており、部員の行事等への参加など、高校生による部活動は、各地域における郷土芸能の伝承に寄与する可能性を持っている。

### (2) モーションキャプチャ装置を利用した郷土の芸能の研究

「郷土の芸能」は学校教育の対象だけではなく、「伝承方法」「演奏動作の分析」「熟練者と初心者の演奏動作の違い」などの問題は、学問的な対象にもなり得る。また、これまで「郷土の芸能」は主として人文科学の研究対象であったが、最近では工学的な方法による研究が増加する傾向が見られ、その例として、モーションキャプチャ装置を用いた研究がある。これまで演奏動作に関する研究は、研究者の主観に頼ることが多かったが、本装置を用いた研究は、「演奏動作の解析」や「初心者のための学習ツールの開発」など、音楽学と音楽教育の研究領域に対し、大きな貢献

をすることが期待される。

### (3) 教育現場(小・中・高校) 学部、保存団体、研究機関の連携による地域貢献

地域貢献は、大学、及び高校等の教育機関に係わる課題のひとつである。その意味からも、高校生、大学生が地域の芸能の担い手から地域に固有の芸能を習得し、習得した芸能を「地域のイベント」「大学、高校における演奏会」などで発表することは、若い世代と地域との結びつきを深め、地域の文化の振興に貢献することにつながる。また、教育系と工学系の学部が連携して教育や研究を推進していくことも大学教育の今日的課題であり、本研究により、地方の大学が地域の教育に新たな役割を果たすことが期待できる。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下の(1)～(4)の研究・活動を通して、高校生及び大学生が郷土の芸能の伝承者と交流しながら、郷土の芸能を習得し、郷土の芸能の振興を図ると共に、郷土芸能の演奏様式と演奏動作を明らかにすることにある。

(1) 地域の共同体における芸能の伝承組織や伝承方法についての調査・研究から、郷土の芸能を次世代に継承していくための指針を得る。

(2) 地域の芸能保存会と連携することにより、郷土芸能部に所属している高校生が、保存会会員から地域の芸能を習得し、「国民文化祭」「地域の行事」等で芸能の発表をする。また、大学生については、学部の授業において保存会会員より芸能を習得し、大学内で郷土芸能の演奏会を開催する。

(3) 芸能保存会会員(芸能の伝承者)と連携して「郷土の芸能」の教材を開発し、小学校で実際に指導することにより、教育的効果を検証する。また、民俗芸能の経験の無い教師のための指導法・指導内容を開発し、映像資料や楽譜等も整備する。上記の活動を通して、学校と地域の保存会等の連携のモデルを

確立する。

(4) モーションキャプチャによる計測データ、及び計測データから作成した画像、グラフより、民俗芸能の舞いや締太鼓の演奏動作における、初心者と熟練者の違いを明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 芸能の担い手、芸能保存会との連携

郷土芸能部に所属する高校生、及び学部学生に対し、芸能保存会会員や芸能の担い手が地域の芸能の実技の指導に当たり、その成果を高校生は国民文化祭等での演奏、学部学生は大学内での演奏会、及び附属校の授業での演奏によって検証する。

「郷土の芸能の伝承法」については、秋田県各地の芸能の伝承者や保存会会員に対する面接調査、民俗芸能の行事の観察等を通して明らかにする。

#### (2) 教育現場（附属校、高校）との連携

高校生については地域の高校と連携し、芸能の習得を依頼すると共に、研究期間中に生徒、担当教員と面接を行い、芸能の習得状況や生徒の意識を調査する。

学部学生については、開発した郷土の芸能の教材に基づいて、附属小学校において授業を行い、児童の授業に対する反応、及び附属小学校の音楽科教諭の評価により、作成した教材の有効性を検証する。

#### (3) 工学系の学部、及び「わらび座デジタルアートファクトリ」との連携

秋田大学の工学資源学部（平成 26 年度より理工学部に変更）の研究室の協力を得て、モーションキャプチャ装置により計測した楽器の演奏動作や、締太鼓の撥先の軌跡を図表化、アニメーション化し、熟練者と初心者の違いを比較検討する。

「ささら」の舞いの動作については、わらび座アートファクトリの協力を得て、保存会会員（熟練者）と高校生（初心者）の「ささら」の演奏動作を計測し、重心（腰）の上下

動の幅、及び足の先と掌の平面上の移動の軌跡を比較検討することにより、両者の違いを検討する。

なお、本研究では、磁気式モーションキャプチャである POHEMUS 社の Liberty を用いた。Liberty は、Liberty 本体、トランスミッタ、身体部位や楽器に装着する「センサ」で構成され、トランスミッタを原点とした座標系でセンサの位置と回転角を 3 次元情報として計測する。

### 4. 研究成果

#### (1) 秋田県における芸能の伝承について

芸能の演じ手が十分に確保できた過去においては、若勢と呼ばれる組織や、実力者を中心に運営される組織により芸能が伝承され、性別や年齢など、演奏者に対する制限が設けられていた。しかし、人口の減少や生活様式が変化するなかで芸能を継承し、担い手の数を確保していくためには、組織の性格を変え、構成員の要件も緩和し、共同体の多くの成員が参加できる組織に変えていくことが必要となる。現地調査の結果からは、子どもや女性なども新たに加わるなど、参加の要件を緩和した芸能は、伝承が途絶えずに演じ続けられる傾向があることが確認された。

また、秋田県北部では、芸能の伝承組織を町内の自治会に組み入れ、自治会が主体となって子どもの指導を行うなど、町内のほとんど全ての住民が芸能にかかわっているという事例も多く見出された。地域の芸能が今後も伝承されていくためには、規約を持ち、年齢・性別などの担い手の参加条件を緩和したオープンな伝承組織に変化していくことが必要であることが明らかになった。

#### (2) 地域や芸能の担い手との連携による郷土芸能の習得、及び学習成果の発表について

##### 高校生による郷土芸能の習得と発表

高校の郷土芸能部の顧問との話し合い、及び取り上げる芸能についての検討の結果、対

象とする高校を秋田県大仙市の高校（分校）に、また、高校生が新たに習得する芸能を地元「横沢ささら」（獅子踊り）に決定した。高校の側では、部活動に参加していない生徒に呼びかけて、「郷土芸能部」の傘下に新たに「ささら部」を組織し、2名の教員が部員の指導・監督や研究代表者・保存会との折衝など、部活動の運営に当たり、活動の体制を整えた。

24年度には、「横沢ささら保存会」の会員による練習や各種行事での演奏を高校生が見学すると共に、高校生が自習するための映像資料を研究代表者が作成し、また、楽器（太鼓、笛、ささら）や獅子頭、衣装等も徐々に揃えていった。25年度は、高校生が保存会の練習に加わり、町内の集会所で保存会員から「ささら」の「舞い」と「道化」の動き、「横笛」の指導を受けると共に、高校の教室でも映像資料を見ながら自習し、「前がわり」という曲のおよその振りや横笛の指使いを習得した。

最終年度には、祭りや地域の行事等に出演したが、演奏経験を積み毎に演奏技術が向上し、「第29回国民文化祭 あきた2014」（10月4日 角館町）では、他の「ささら」「祭囃子」の保存会会員と共に、大勢の観客の前で高校生が「ささら」を演じた。

「ささら部」の高校生は、消極的な気持ちで「ささら」を習得し始めたというのが実情であるが、アンケート調査と面接調査からは、7人の内の1人を除き、観客の前で「ささら」を演じることに誇りと充実感を持つようになり、教育的な効果が確認された。

なお、本研究の対象となった高校の郷土芸能部は、11月に開催された秋田県高校文化連盟郷土芸能部門の発表会において、「ささら」を演目の一部として演奏した。発表会では審査員より高い評価を受けて「敢闘賞」を獲得し、来年度以降も「郷土芸能部」のレポーターとして「ささら」を引き継いでいくことが

決定された。

また、秋田県高校文化連盟の郷土芸能部門に参加している高校生全員を対象としてアンケート調査を実施し、多変量解析により部員の回答を分析した結果、ア．地域住民によって評価されることから生まれる誇りは、生徒の意欲、部活動に対する肯定感、生活態度等に有意義な影響を与え、イ．郷土芸能関係の部活動、及び郷土芸能の学習においては、「部員であること」「地域住民であること」「演じる芸能」等に対して誇りを育てることが重要であり、高校生が地域の住民との結びつきの中で郷土の芸能を演じることは教育的に意義がある、という結論を得た。

学部学生による郷土芸能の習得と成果の発表、及び教材の開発

24年度には、音楽教育研究室所属の学生が、秋田市の「土崎港囃子保存会」の会員より「寄せ囃子」を習い、保存会会員から助言を受けながら「郷土の音楽」の教材を作成した後に、附属小学校4年生を対象に授業を行なった。

肯定的な回答を2点、否定的な回答を1点とした簡単なアンケート調査を授業後に実施したところ、「授業の楽しさ」「授業に対する興味」「演奏の上達」についての平均点は、それぞれ1.92点、1.97点、1.82点で、指導内容と指導方法の有効性が確認された。

25年度と最終年度には、民俗舞踊家による指導、及び映像資料等により、学部学生が秋田県羽後町の「西馬音内盆踊り」の「踊り」「囃子」「地口」「太鼓」を習得すると共に、「西馬音内盆踊り」を題材とした教材を作成した。附属小学校において4年生を対象として授業を行い、児童の反応や音楽科の教諭の評価からは、作成した教材の教育的効果が確認された。

また、25年度の2月には、学部学生、民謡演奏家、民俗舞踊家による演奏会を大学のインフォメーションセンターで開催し、「民謡」「民謡手踊り」「西馬音内盆踊り」「土崎港囃

子」の演奏発表を行った。

#### 地域連携の成果

保存会会員による「ささら」の模範演奏の録画や、「わらび座アートファクトリ」での「ささら」の演奏動作の計測は、「ささら」の演奏動作の記録・保存としての価値を持つと同時に、保存会会員にとっては、「ささら」を次の世代に伝承していくことの動機付けともなり、最近では余り演奏されなくなっていた曲を復活させるという結果も生んだ。さらに、本研究、活動を通し、郷土の芸能の振興のための「高校と地域との連携」のモデルを確立、提示することができた。

#### (3) モーションキャプチャ装置を利用した「郷土芸能の演奏演奏動作」と「初心者と熟練者の相違」についての研究

##### 祭囃子の太鼓の演奏動作の解析結果

祭囃子の締太鼓の演奏動作を分析するために、工学資源学部の研究室の協力を得て、撥先の軌跡を表示するアプリケーションを開発し、分析に用いた。

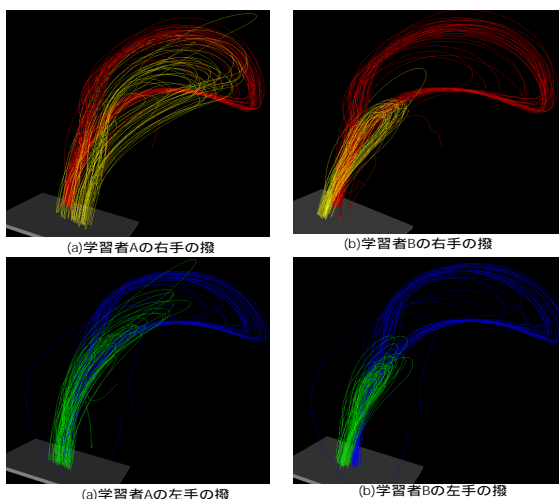


図 1：初心者と熟練者の太鼓の軌跡の違い

上の図 1 は、2 名の学習者（初心者）による締太鼓の撥先の軌跡（右回りの動き）と、熟練者（祭囃子保存会の会員）の撥先の軌跡とを比較したもので、黄色が学習者（2 名）の右の撥先、赤色が熟練者（1 名）の右の撥先の軌跡、緑色が学習者（2 名）の左の撥先、

青色が熟練者（1 名）の左の撥先の軌跡を示している。計測したのは下太鼓のリズム（付点 8 分音符と 16 分音符の繰り返し）で、2 名の学習者（初心者）はブラスバンド部で管楽器を演奏した経験はあるが、締太鼓を打つのは初めてである。

図 1 からは、学習者の撥先の軌跡は不安定であるのに対し、熟練者の軌跡は安定しており、同じ軌跡を描いていることが分かる。撥先が描く軌跡の大きさ、形状についても学習者（特に B）のものは小さく、単純な楕円形のような軌跡であるのに対し、熟練者の描く軌跡は大きく、横に膨らんだ、より複雑な形をしている。このことから、熟練者の演奏動作は大きく、また横に膨らむ動きにより、速度と加速度を調整して、動きに溜めをつくっていると考えられる。また、熟練者は力を抜いて撥を軽く握ることにより、撥先の回転速度が大きくなることも確認された。

##### 「ささら」の舞いの動作の解析結果

モーションキャプチャ装置で計測した「ささら」の一連の動作を 32 の部分に分割し、部分の特徴づける動作から、各部分を「歩行」「回転」「足踏み」「横跳躍」「ジャンプ（左足）」のいずれかに分類した。

映像資料、及びモーションキャプチャデータより作成したアニメーションからは、姿勢を除いては、初心者と熟練者の間の見た目の大きな違いは認められなかった。

図 2 と図 3 は熟練者と初心者の腰の高さ、及び上下動の幅を示したものであるが、熟練者は横跳躍（体力測定の「反復横跳び」のような動作）において、重心の位置が上下に大きく動いているのに対し、初心者は上下の動きの幅が小さく、腰が入らずに、棒立ちのような状態であり、回転動作についても、同じような特徴が見られた。このことから、初心者と熟練者の最も大きな違いは、「腰」、あるいは「重心」の位置であり、初心者は腰の位置が高く、腰の上下動の振幅も小さいことが

明らかになった。

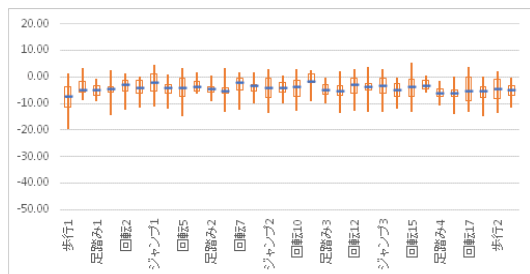


図2：初心者の腰の上下動の幅

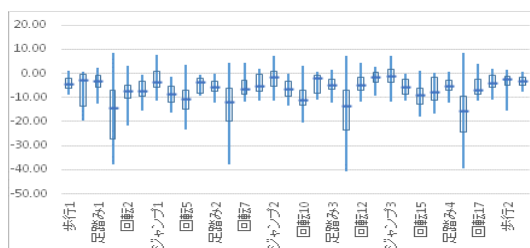


図3：熟練者の腰の上下動の幅

また、「横跳躍」「回転」「ジャンプ」について、初心者と熟練者の間の左足先の動きの軌跡を比較すると、予想に反して熟練者の軌跡は初心者のもよりも単純な形状で、運動量も少ないという結果であった。初心者が舞いの動作を身につける際には、動作を単位に区切り、単位毎の特徴を把握していくが、その際に特徴的な動作を誇張して認識していると考えられる。上達化とは、「誇張された動きが、合理的でエネルギーのロスが少ない動きに置き換えられていく過程」であると言える。

舞いの動作を細分化し、また手の動きも含めて、初心者と熟練者の動作をさらに詳細に比較することが、今後の課題である。

#### 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計6件)

桂博章「郷土芸能部に所属する秋田県の高校生の意識」 秋田大学教育文化学部紀要(教育科学)第68集(2013) 秋田大学教育文化学部(査読無) pp.1 - 8.

桂博章「『郷土の芸能』の学習を促進させる要因 - 高校の部活動についての調査より - 」 学校音楽教育研究 第17巻(2013) 日本学校音楽実践学会(査読無) pp.226

- 227 .

桂博章「秋田県における『ささら』の分布と伝承」 秋田大学教育文化学部紀要(教育科学)第69集(2014) 秋田大学教育文化学部(査読無) pp.37 - 44.

桂博章「秋田県の民謡三味線の成立と流派間の奏法の違い」 秋田大学教育文化学部紀要(教育科学)第70集(2015) 秋田大学教育文化学部(査読無) pp.1 - 7.

桂博章「小中学校における『郷土の音楽』の指導法の開発」 学校音楽教育研究第19巻(2015) 日本学校音楽実践学会(査読無) pp.162 - 163.

桂博章「秋田県における民俗芸能の伝承」 秋田学・白神学総合成果報告書(平成22年4月~平成26年9月)(2015)(査読無) pp.56 - 90.

〔学会発表〕(計4件)

桂博章「秋田県における民謡三味線の流派の形成について」 日本音楽表現学会第10回大会、2012年6月24日、山梨大学

桂博章「『郷土の芸能』の学習を促進させる要因」 日本学校音楽教育実践学会第17回大会、2012年8月19日、鳴門教育大学

桂博章「秋田県の3匹獅子舞について - 県北部と中央部の比較 - 」 日本民俗音楽学会第26回大会、平成24年12月8日、東京工業大学

桂博章「小中学校における『郷土の音楽』の指導法の開発」 日本学校音楽教育実践学会 第19回大会、平成26年8月17日、熊本大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

桂 博章 (KATSUR, Hiroaki)  
秋田大学・教育文化学部・教授  
研究者番号：60185832

##### (2) 研究協力者

海賀 孝明 (KAIGA, Takaaki)  
柴田 傑 (SHIBATA, Takeshi)